

岩手・志羅山遺跡 (1)



(一) 関

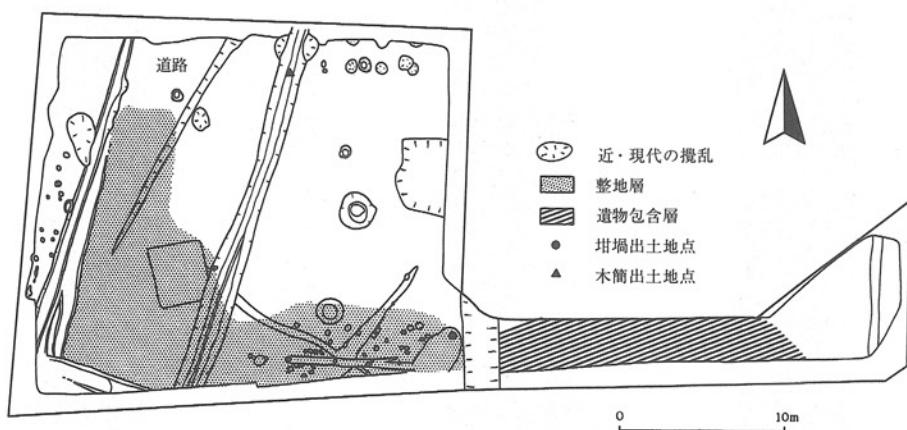
- |   |               |                        |
|---|---------------|------------------------|
| 1 | 所在地           | 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山       |
| 2 | 調査期間          | 第八〇次調査 一九九九年(平11)四月~八月 |
| 3 | 発掘機関          | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 4 | 調査担当者         | 酒井宗孝・安藤由起夫             |
| 5 | 遺跡の種類         | 都市跡                    |
| 6 | 遺跡の年代         | 一二世紀                   |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                        |

本調査は、「毛越寺街路」建設に伴うものである。調査対象区は、県道「毛越寺・巖美線」の東端北側で、今次は七六六m<sup>2</sup>を調査した。

周辺部はこれまでに、七九次にわたる発掘調査が行なわれ、この結果東側に隣接する泉屋遺跡と共に、一二世紀奥州藤原時代の中心である「都市平泉」を考察する上で貴重な資料を多数

提供している。

本調査で検出された主な



遺構配置図

遺構は、一二世紀の道路、井戸、土坑、柱穴群、鋳造関係の遺物を中心とする包含層などがある。

今回報告する一点の木簡は、調査区西側を南北に走る道路東側溝の北端部から出土したものである。道路は、一九九四年度の第六六次調査で検出された遺構で、確認された部分の総延長は約三〇〇mとなる。南端部から約一〇〇mは真北方向に向かい、それより北では一一〇一八度東に傾く。今次調査区の北側は未確認であるが、このまま延長すると無量光院の東縁に接する角度である。側溝は、幅〇・五五～一m深さ二～九五cmを測り、少なくとも一回の掘り返し（改修）が行なわれたことが確認された。木簡以外には形代や木器部材などの木製品、かわらけ、渥美・常滑産の陶器が出土している。なお、土坑からは墨書を有する木屑が出土しているが、文字かどうかも不明。また、井戸跡からは平仮名「□」<sup>〔うか〕</sup>が墨書されたかわらけの破片が出土している。

## 8 木簡の釈文・内容

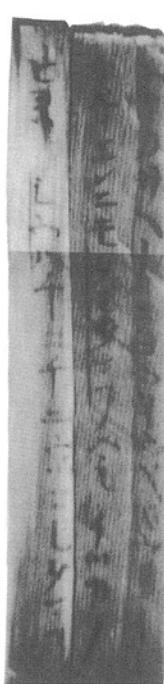
(1) 「トヤカサキノニヨウホウキヤウノイシヲハ  
ケチエンニモタセタマフヘシ イツカノ  
ビヨリシウハチニチニウツニシタマフナリ。」  
〔マカ〕 273×51×4.5 011

(2) 「一一一一四」

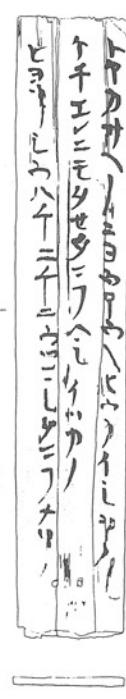
265×57×4.5 061



(2)



(1) (赤外線画像 部分)



(1)



(1)

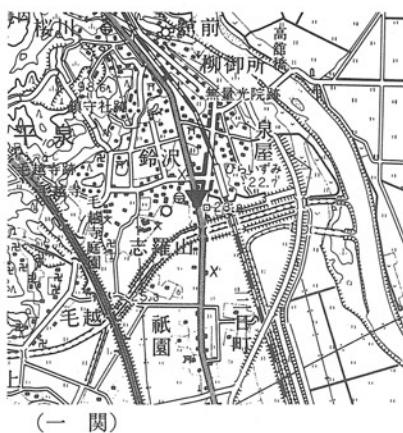
(1)は、上下両端に一~二mm幅の削ぎ取り面、下端から一・四mmに径約二mmの穿孔二個を持つ。墨書は表面にのみ認められ、片仮名五五文字が記されている。三行目一三文字目の「ニ」は「マ」の可能性もある。解釈及び内容は検討中であるが、「トヤカサキ」は地名で、毛越寺別院の金剛院鳥屋ヶ崎坊の可能性が高い。「ニヨウホウキヤウノイシ」が「如法経の石」とすれば、兵庫県尼崎市大物遺跡などから出土している「礫石経」の可能性があり、「結縁に礫石経を持ってきてほしい」との依頼文と考えられる。これ以下の文は詳細は不明であるが、「五日の日より十八日に写にし給うなり」と読むことができる。

(2)は、左側の上下隅の角が取られ、折敷の底板と考えられる。墨書は表面のみに認められ、三及び四が異体となるが、一応「一二三四」と読める。

文字の解釈及び解釈にあたっては、入間田宣夫氏、川島茂裕氏、藤原良章氏にご教示いただいた。（酒井宗孝（花巻市教育委員会））

## 岩手・志羅山遺跡 (2)

1 所在地	岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山
2 調査期間	第八二次調査 一九九九年（平11）九月~一〇月
3 発掘機関	平泉町教育委員会
4 調査担当者	及川 司
5 遺跡の種類	屋敷地跡
6 遺跡の年代	一二世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	



(一) 関

志羅山遺跡は平泉遺跡群の中心域の南端に位置し、海拔標高二四七三mの段丘上に広がる。全体的には北西から南東方向へ緩やかに下がる地形で、旧小河道の低地も観察できる。遺跡の南側には比高で三m低い太田川周辺の沖積低地があり、旧河道の低地はこの沖積低地の方向に向かっている。

一九九七年度に財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財